

■ 中課題1 鳥獣を誘引しない営農管理と多獣種の侵入を防ぐ複合的被害防止技術

農研機構 近畿中国四国農業研究センター 井上雅央（中課題責任者）

中課題の概要

農耕地における客観的な餌源供給の実態を明らかにした上で、餌源生産を抑止する営農形態への改善手法を水稲（水田および畦畔管理：滋賀）、野菜（被害を受けにくい野菜栽培管理：奈良および近農研）、果樹（被害を防ぎやすい栽培管理：島根および近農研）の作物別に開発した。また、イノシシ、ハクビシンの味覚を明らかにした上で被害防止に忌避植物などの利用が可能かどうかを検討（近農研）するとともに、複数の獣種に対応できる侵入防止柵を開発した（山梨、近農研）。さらに、カラスなど鳥類を対象とした、安価で作業性の優れたネット展張技術を開発した（中央農研）。さらに、今回の研究では、農家自らが主体となって自立的に取り組める内容であることを検証するため、各機関の開発技術を島根県美郷町の試験圃場において公開するとともに試験圃場を実習の場として吾郷地域婦人会を対象に技術移転した上で、地域への波及効果を調査した。

波及効果

試験圃場での技術移転講習会（写真上）で修得した技術は多くの受講者が各自で実践した。その結果、営農意欲が高まり、自然発生的に販売所が自力開設された（写真中央）。また、婦人会が自ら主催者となって研修会を開催（写真下）し近隣市町村に取り組みを紹介するなどした。さらにこうした取り組みがテレビ、新聞等で紹介されたことから視察が相次ぎ、近隣市町村にとどまらず全国への波及効果は極めて高かった。

本事業での取り組みの参加者は60代が中心（表1）で取り組み内容では野菜や果樹の栽培改善や話す機会が増えた点が評価された（表2）。取り組みの結果、被害軽減が実現したため、栽培品目や面積を増加（表3）させた人も多く、地区で約50アールの休耕地が復活していた。（表4）。このアンケートでは取り組みに対する感想として、「被害が軽減された」、「生き甲斐ができた」、「連帯感が高まった」、「畑をもっと増やしたい」、「家での会話が增えた」など、すべて肯定的な記述内容であった。



表1 アンケート回答者の年齢構成 (人)

	30代	40代	50代	60代	70代	80代	合計
畑なし	1	0	1	3	0	3	8
畑あり	3	5	10	30	19	9	76

表2 畑を持つ参加者にとって青空サロンの取り組みで何が良かったか (複数回答)

	30代	40代	50代	60代	70代	80代	合計	(%)
1 野菜栽培改善法		3	3	7	23	13	54	71.1
2 果樹栽培改善法		2	1	8	25	15	57	75.0
3 鳥獣害の話		1	3	7	23	11	51	67.1
4 柵作り実習		0	0	5	17	6	33	43.4
5 追い払い実習		0	1	6	14	8	30	39.5
6 管理共同作業		0	0	9	18	7	36	47.4
7 生産物が販売出来たこと	1	2	8	17	10	4	37	48.7
8 皆で話す機会が増えた	1	2	10	10	14	8	45	59.2

1: 鳥獣から守りやすい多収技術等 2; 脚立不要で守りやすい果樹の超低樹高栽培
 3: なぜ激化するかの座学 4: 柵作りと多獣種対応、慣れ個体への対応技術実習
 5: 花火発射実習 6: 試験圃場 (青空サロン) の作付け、除草等共同管理 7: 参加者が自然発生的に開始したサロン市場での販売 8: 共同作業や販売終了後のお茶のみ、よもやま話

表3 取り組み開始後、畑作形態がどう代わったか (複数回答)

	30代	40代	50代	60代	70代	80代	合計	(%)
栽培品目が増えた	1	3	4	19	11	2	40	52.6
作付け面積が増えた	1	2	5	17	9	1	35	46.1
収量が増えた	1	1	4	9	5	1	21	27.6
変わらない	0	1	0	2	2	6	11	14.5

表4 作付け面積が増えたという回答者の具体的な面積

30代	40代	50代	60代	70代	80代
10a→15a 4a→5a	2a→3a 2a→3a	2a→3a 2a→3a 5a→10a 5坪→10坪 少しだけ	1a→1.5a 2a→3.5a 1.5a→3a 0→3a 3a→6a 3a→7a 2a→3.5a 0.5a→1a 3a→6a 0a→少し 1.5a→2a 少しだけ 3a→5a 隙間をつめ 1a→3a	2a→3a 3a→5a 2a→5a 1.5a→2a 1a→2a 2a→3a 1a→2a 2a→2.5a	10坪→15坪
6a	2a	7a+少し	22a+少し	10a	5坪